

されます。ただ日時が不明確で前後を取り違える  
事が多いです。

最後に申し上げたい事は二度と戦争の無い平和  
の時代が永く続くように、そして戦死された皆様  
様の御冥福を祈ります。

## 愛馬と別れて

### 南方戦線へ

兵庫県 山下 功

私は、兵庫県和田山町の農家の長男として生ま  
れました。当時、私の家族は、両親、弟妹四人の  
六人家族でした。父は農業で七反歩の耕作をして  
いました。

私は糸井村寺内尋常高等小学校を卒業した後、  
両親の手伝いをしていました。そして徴兵検査に  
は第一乙種に合格しましたが、現役の入隊ではな  
くて、昭和十五（一九四〇）年二月に教育召集が  
来まして姫路の第五四五部隊に入隊しました。

ここで初年兵教育を六カ月間受けた後、教育召  
集解除になり、一旦家に帰りました。そこで、結  
婚し、灘の酒造会社に勤務しておりました。

その年の十一月であったと思いますが、再度赤  
紙が届きました。正式の召集令状で、再び姫路の

第五五四部隊に入隊しました。この部隊は後に満州に移動しました。兵舎は朝日兵舎と敷島兵舎がありました。第一中隊西本隊は朝日兵舎で、五〇センチの厚いレンガ作りの甲編成の兵舎でした。設備も立派で耐寒耐暑の兵舎でありました。

満州での印象は大変寒いこと、風呂から出るとタオルが凍っていたので驚いたものです。私は軽重兵で軍馬の世話係として、手入れや訓練などを行いました。特に、世話をした中で心に残っている愛馬は「セツクン（節薫）」と呼んでいました、非常に気の強い元気な馬でしたので新しい蹄鉄を取り替えるにも苦労しました。黒毛の混ざった白馬で、部隊の中で一番だと思いました。

満州の住木斯<sup>ジャムス</sup>での事です。昭和十六年六月頃、ふと姉の主人が同部隊に居ることが判明し出会うことができました。異国の地で身内の者と出会えることは本当にうれしくて涙が出てきました。元気でいるか、また何をしているのかと聞かれて馬

の世話係（鉄チン工）をしていますと義兄に話しました。

その当時軍隊内では、こんなはやり言葉がありました。

「一にヨウチン、二にラツバ、三に炊事の常番、それよりよいのが犬ワンワン、もう一つよいのが鳩ポツポ、アホのするのがガスのケツ、芋屁、豆屁で尻匂う。死物狂いの鉄チン工」

つまり兵隊の任務の内容を読んだものです、ラツバ兵、炊事兵はよい方でアホがするのが鉄チン工（馬の蹄鉄）、馬の世話係は鉄チン工と呼ばれ、大変な重労働の任務とされていた。一方ガス兵とは人が何を食べたかを鼻をきかせて判明できなければならなかった。人の尻を嗅いでいるだけではアホである、という意味である。義兄は私が鉄チン工をしていると聞き大変驚き、これでは体がいかれて死んでしまうぞと言って心配してくれました。

義兄は連隊本部で連隊長の当番をしていました。

その関係かどうか兄の助言があつてかどうか、その後しばらくしてガス兵に転属の命令が来ました。ガスについて教育を受けることになりました。

現在では古い話ですので詳しいことは思い出せませんが、自分一人のために与えられた教育でした。その教育直後に大移動があり、愛馬の「セツクン」とも別れることになりました。目の大きな馬「セツクン」は今でも、その後どうなったか思い出すことがあります。

満州から朝鮮に行き、台湾を経て「江ノ島丸」で北サンフェルナンドを目指してルソン島の西岸に沿って南下しました。船団で移動したのですが、途中で「乾端丸」は機関故障のために船団に遅れたものの、兵員は無事ミンダナオ島に上陸しました。

連隊はバレテ峠で集結し戦争に入りました。バレテ峠で不思議にも義兄にばったり出会いました。その時は多くは語らず「元気で頑張つて行くよ」と言つて別れました。後で思うとこの時が義兄と

の最後の別れでした。元気な時の姿がいまでも胸に浮かびます。私はバレテ峠には一年間ほどいましたが義兄の戦死は知らず復員してから知らされました。大変お世話になり残念で悲しくて辛くてたまりませんでした。

バレテでの大和谷には連隊本部があり、第一大隊本部、第二中隊もいました。第三中隊と第二中隊は自動車隊で、東北方のマンガヤン陣地に布陣していて、ここは後方の輸送基地でもあったのです。バンバン、バヨンボン、アリタオ、ボネ、サントフェ、ムガンは檄兵団の後方基地でもあり、弾薬、糧秣等の輸送の任務にあたりました。

多くの戦死者が出る玉砕地では、穴の中で行動していました。三月頃からは戦況が激しくなり第二大隊（自動車隊）はヨウコウ山陣地に布陣して補給の任務にあたりました。

九死に一生を得たことは思いもよらぬことでした。多くの戦友が亡くなり、死に直面し、幾度と

なくその光景を思い浮かべながら、戦友の冥福を祈るばかりです。戦争とはこれほど悲運でなりません。多くの出来事も記憶も高齢になり、思い出せませんが、終戦したことは九月になってピナパンで初めて知りました。

日本にはどのようにして帰れたのか思い出せませんが、上陸したのは呉港です。夏の軍服のまま、昭和二十一年三月、米を二合ほど貰って、懐かしの我が家に帰ることができました。

父親は私の応召中に病気で死亡、妻も病死しており、母親と二歳になる娘が迎えてくれました。戦争のために肉親との最後の別れができなかったことが無性に悲しくてたまりませんでした。戦地では「元気で頑張って行こうな」と言っただけで別れた義兄も戦死しており、残された姉、父親の顔も知らない二人の子供が不憫でなりません。母親もまた、私のいない中、主人を亡くし、嫁を亡くし、また娘婿を亡くし、悲しい日々を送っていたかと思うと、戦争のために家族もまた大きな犠

牲を払ったのです。

姉のことも、二人の子供を連れて途方に暮れていましたが、励ましあい、終戦の日本の国民すべてが、耐え抜いて行くしかなかったのです。一生懸命頑張ろうと心に決めました。

復員してからは、牛の人工受精士の資格をとり、糸井村で農家の注文に応じて但馬牛の受精をしていました。その当時受け持っていた牛の数は二百頭余りで、一日に三頭から五頭程度受精する日もありました。当時、一頭当たりの受精料は五百円程でした。一方では農業にも精を出し生活をしてきました。